

フィールドワーク便り

ルワンダ国カヨンザ近郊で見た脱プラスチックの日常

平尾 莉夏*

2024年9月22日から29日まで、ルワンダの地方都市カヨンザ近郊に位置するルミラ郡に8日間滞在した。ベナンでプラスチックごみに関する研究に取り組んできた私は、プラスチック製包装（プラ製包装）禁止の先進事例とも評価されるルワンダにおいて、生活の中でプラ製包装がどのように使われているのか、その実態に興味をもちルワンダへ渡航した。



写真1 少量ずつ包装され陳列されている多様な食材

プラ製包装の禁止政策

プラスチックごみによる環境汚染を受けて、アフリカでは30カ国以上でプラ製包装を禁止する法律が施行されているが、多くは実効性に乏しい。その中でルワンダは、2008年にプラ製包装の使用および輸入などを禁止して以来、プラスチックの使用量と輸入量が減少しており [Babayemi *et al.* 2019]、先進事例として評価されている。

ベナンでは、2017年に非生分解性プラ製包装の製造、使用、投棄等を禁止する法律が施行された。しかし、2025年1月現在、非生分解性プラ製包装が市場や路上で販売される食品や日用品の包装として使用され続けて

いる。納豆、ローリエの葉または小魚などの多様な食材の少額ずつの購入時、ピーナッツペースト、粉末オクラ、豆などの液体や粒状の商品の購入時（写真1）、およびヤム芋の素揚げやドーナツなどの路上で販売される軽食の持ち帰りの際に、安価で丈夫、かつ耐水性のあるプラ製包装の利便性が目立つ。ベナンでは、各料理に不可欠とされる調味料が存在し、それらは特定の料理を調理する際に必要な分量だけ日々購入される傾向があるため、多様で時に液状または粒状の副材料を少量つまり25～50 FCFA（4 FCFA ≈ 1円、2025年1月現在）などの少額分のみ購入することがある。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ルワンダでは、2008年にプラ製包装の、2019年には使い捨てプラスチックの製造、輸入、使用および販売が禁止された。テレビなどのメディア、および毎月最終土曜に行なわれ、各世帯18から65歳の最低1名の構成員の参加が求められる奉仕活動（*umuganda*）を通して、2004年から禁止に関する周知キャンペーンが打ち出され、当時プラ製包装は有害な袋（*deadly bags*）と呼ばれた [Danielsson 2017]。数年後に情報は違反者への罰則に関するものが多くなり、その後、禁止対象のプラ製包装の所持を確認する検査が増え、保管されたプラ製包装は回収されていった。

プラ製包装のない生活

地方都市カヨンザ近郊のルミラ郡に滞在した8日間、ホームステイをした。お世話になった家族は、7人の子をもつ夫婦、その9歳の末っ子、および夫婦の妻の甥にあたる23歳の青年の4名で暮らしていた。途中、首都キガリで勤める21歳の次女が帰省し、5名となった。自家消費用にキャッサバと豆を畑で、バナナを家の庭で栽培していた。また、ヤギを飼育していた。

家族の生活の様子を、家の中で観察させてもらった。まだ日が出ていない朝5時半頃、父は畑へ出かけ、戻るのは正午から13時頃であった。母は父と一緒に畑に行くこともあれば、薪を集めに行くこともあった。甥の青年は、近隣都市カヨンザやカバロンドなどで定期市で販売するため、手作りの液体洗剤を作り、飲料用PETボトルに詰めて自転車の荷台にくくり付け、市場へ向かった。帰省



写真2 昼食にもらったキャッサバと豆の煮込みと穀物粥

中の次女は、穀物粥（*icyayi*）を作り、洗濯をし、昼食の準備をしていた。父が家の庭畑のバナナを切って台所に持ってきているところや、ヤギを父と甥の青年がさばき母と次女が肉として調理しているところを目にしたが、買い物帰りなどで家族の誰かがプラ製包装を手を持っているところを一度も見なかった。

滞在中、朝食として穀物粥を飲ませてもらった。昼食および夕食では、キャッサバと豆の煮込み（*imyumbati and ibishombo*）（写真2）、バナナの煮込み、およびキャッサバの練り物（*ubugari*）が主だった。私がこれまで調査をしてきたベナンでは、油をたっぷり使い塩味があることを気に掛けられていたが、これに比べてルワンダで食べた料理は薄味だった。次女によると、塩、コショウ、コンソメを調味料に使い、豆、オクラ、小魚を米やキャッサバの練り物の付け合わせに使うそうだ。

使用され続けるプラ製包装

定期市では、野菜、果物、魚などの食品や衣類が所狭しと並んでいた。商品の傍らには



写真3 定期市で買い物中の女性のマイバッグの中

多くの場合、リユースを想定したバッグ、コピー用紙の裏紙で作られた紙袋、あるいは大きさを表す規格番号のスタンプがある紙袋が用意されており、それらが商品購入時の「レジ袋」として使われているようだった。実際に、私が市場や売店で果物やパンを購入した際、紙袋が欲しいと言うと、大きさに応じて1枚当たり50～100 RWF（10 RWF≈1円、2024年9月現在）で購入する必要がある。市内でも、バイクに紙袋を載せ運転する人や、片手に紙袋を持って歩く人を見かけた。

定期市には、マイバッグを持参する人々もいた。見せてもらったマイバッグの中には、異なる種類の野菜、石鹼、購入した油を入れたPETボトルおよび購入した米を入れたプラ製包装などが直接混ざって入っていた（写真3）。

このように紙袋やリユースバッグが広く提供される中、使い捨てプラ製包装が一部使用され続けていた。揚げ物などの汚れや水分のつくもので商品自体が高額でないもの（写真4）、および米（写真3）の販売の用途である。プラ製包装の使用を観察したうえで、それについて尋ねようとする、「使っていない」



写真4 プラ製包装に入れて手渡された、ひとつ100 RWFのドーナツ（ibidiya）

と2名から言われた。そのうち1名は、尋ねようとする私たち外国人を前に、隣にいる売人から「それを持っていると問題になる」と声をかけられていた。米と油の売人は、「200枚入り」「カンバラでの製造」と書かれたプラ製包装のパッケージを私に見せ900 RWFだったと話し、片づけたうえで、「警察に見つかると捕まる」と話した。

まとめ—ルワンダの食文化と脱プラスチックの関係？

本渡航の関心は、ルワンダでの生活においてプラ製包装がどのように使われていないのか、その実態を知ることにあった。私の8日間の滞在中、ルラミラ郡での家族は自家栽培した作物および家畜を主に消費し、家族の誰かがプラ製包装を手を持っているところは観察されなかった。市場では紙袋などが「レジ袋」として用意され、客のマイバッグの中には異なる種類の製品が個々の包装なしに混ざって入っていた。しかし、違法行為と認識されながら、揚げ物などの汚れや水分のつくもので商品自体が高額でないもの、および米の販売にはプラ製包装が一部使用されていた。

アフリカ諸国でのプラ製包装禁止政策の課題として、法の十分な施行、利害関係者による抵抗、および代替品の限定的な存在が指摘されている [Nyathi and Togo 2020]。一方、ルワンダのプラ製包装禁止政策の成功要因として、観光業など外部セクターに依存するサービスベースの開発戦略、および地域の環境政策を先行する政治的意図が指摘されている [Behuria 2021]。こうした議論に考えを巡らせつつ、私はベナンでトウモロコシの固粥を濃いソースにつけながら思った。多様な副材料を用いないルワンダの食文化では、少量ずつの液状・粒状の商品を購入する習慣が生まれにくく、結果としてプラ製包装の必要性が低かったことも、同国の禁止政策の成功を支えた可能性はないだろうか？

引用文献

- Babayemi, J. O., I. C. Nnorom, O. Osibanjo and R. Weber. 2019. Ensuring Sustainability in Plastics Use in Africa: Consumption, Waste Generation, and Projections, *Environmental Sciences Europe* 31(1).
- Behuria, P. 2021. Ban the (Plastic) Bag? Explaining Variation in the Implementation of Plastic Bag Bans in Rwanda, Kenya and Uganda. *Environment and Planning C: Politics and Space* 39(8): 1791–1808.
- Danielsson, M. 2017. The Plastic Bag Ban in Rwanda: Local Procedures and Successful Outcomes—A Case Study on how Rwanda Implemented a Nation-wide Ban on Plastic Bags. Master thesis, Uppsala University.
- Nyathi, B. and C. A. Togo. 2020. Overview of Legal and Policy Framework Approaches for Plastic Bag Waste Management in African Countries, *Journal of Environmental and Public Health* 2020.

フィリピンの独立活動家たち

瀬名波 栄 志 *

どのように人々は活動家になるのだろうか？筆者が専門とする社会運動研究（正確には資源動員論）はデモが発生するメカニズムを明らかにする研究分野であり、社会運動組織に注目することが多かった。たとえばどのように社会運動組織が協力し合ってデモを組

織したのかを明らかにする、といった具合である。一方、近年の社会運動を見渡すとむしろ組織に参加していない人々が組織・参加した運動が目立つ。2010年代初期のアラブの春やスペインのインディグナス運動、アメリカでのオキュパイ運動では特定の社会運動組

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科